



シールド機の発進式の様子。2004年4月に実施した「沈黙のシールドマシン展」の目玉となった(写真:右ページも東京ジオサイトプロジェクト制作委員会)



## 東京ジオサイトプロジェクト

国土交通省東京国道事務所  
前田建設工業・熊谷組JV  
クリエイティブアダック

共同溝を能舞台や博物館に見立てる  
発想のざん新さと高い広報効果で群を抜く

大賞を受賞した「東京ジオサイトプロジェクト」は、東京都港区にある麻布・日比谷共同溝の工事現場を能舞台や博物館に見立てて公開し、市民に土木の魅力を伝えようという企画だ。国土交通省東京国道事務所が主催し、施工者の前田建設工業・熊谷組JVや企画会社のクリエイティブアダックとともに実施した。

プロジェクトの第一弾として、狂言師の野村萬斎氏や作家の荒俣宏氏

らを招いたイベントを2003年11月に開催。新聞社やテレビ局約30社が取材に訪れるなど、高いPR効果を上げた。2004年4月には、現場の技術者が「地底学芸員」として共同溝の仕組みや技術を紹介する「沈黙のシールドマシン展」を開いた。2度のイベントで現地を訪れた市民は約2800人に上った。

ホームページによるPRにも注力。「現場や技術者のカッコよさ」を伝

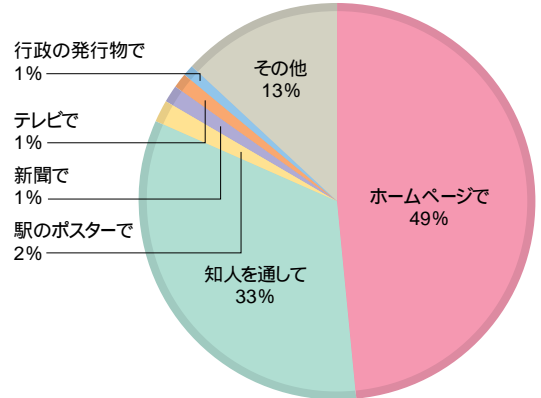
えることを主眼に作成し、アクセス数はこれまでに1000万件を超えた。2度目のイベントの際に実施したアンケートでは、来訪者の約半数が「ホームページをきっかけにイベントを知った」と答えている。

クリエイティブアダックの山名清隆プロデューサーによると、イベントには合計で5000万円弱の費用がかかったが、マスコミ報道による広告効果は約3億円分になるという。



2003年11月に地下40mの共同溝で上演した狂言の様子。写真左が野村萬斎氏

### 来訪者がジオサイトプロジェクトの「沈黙のシールドマシン展」を知ったきっかけ



「東京ジオサイトプロジェクト」のホームページ( <http://www.geo-site.jp/> )。技術者や作業員を写真入りで紹介するページなどを通して、工事現場の魅力を伝えた

### 市民の声 | 地下空間の魅力を見事に表現

「不思議」と「ミステリー」の共同溝という地下空間を、日本古来の伝統芸能で幻想世界として見事に演出している。

(小松恒雄, 道頓堀川を考える協議会事務局長)

私も現場を見た。とにかくスケールの大きさに圧倒され、感激し、土木工

#### 審査で評価されたポイント

独自性	ざん新さ	インパクト	親しみやすさ	PR効果	汎用性
○	◎	◎		◎	

事に対する考え方が変わった。  
(永森昭紀, 名橋「日本橋」保存会事務局長)

土木という無意識の領域に光を当てた事件。工事現場そのものがこれほど魅力的な媒体になるなんて。

(池田正昭, 打ち水大作戦本部)

土木が文化の一翼を担うことを実証できたのは素晴らしい。

(大橋圭介, 鎌倉広町・台峰の自然を守る会事務局長)

(注) 表中の評価は、二次審査員と最終審査員の評価を基に編集部がまとめた。◎:特に優れている ○:優れている 無印:普通

### 狂言の発想は一通のメールから

審査では、地下構造物と伝統芸能という組み合わせのざん新さが注目を集めた。「お金をかければ何でもできることを示す事例」との見方も一部にはあったが、内容の面白さやPR効果を評価する審査員が多数を占めた。

狂言を上演するアイデアは、山名プロデューサーが共同溝の写真を電

子メールで知り合いに送り、「この場所で何かやりたい人はいないか」と呼びかけたことをきっかけに生まれた。メールが転送を重ねて日本能楽会の会長の目に留まり、上演の話を持ちかけられたという。

「今回のプロジェクトで、土木を面白いと感じてくれる人は想像以上にたくさんいると実感した」と山名プロデューサーは言う。「地下空間をサブカルチャー的にとらえる人も

多く、今後はそういった面から新しい見せ方ができそうだ」(同氏)

イベントの前後で、現場の職員の意識が変わったことも大きな効果だった。前田建設工業JVの前田真統括所長は、「職員が学芸員として来場者と直接話し、よい反応をもらったことで、仕事に自信を持った。私を含めて、仕事を苦勞ではなく楽しみとして感じられるようになった」と話す。